

ミシェル・ルヴォンによる『源氏物語』フランス語訳の試み

常 田 槇 子

はじめに

2012年4月のオルシ訳『源氏物語』（イタリア語）の刊行は記憶に新しいが、近年『源氏物語』を原文から直接翻訳する作業が各国で進んできている。『源氏物語』のフランス語訳としては、抄訳も含めて現在6種類のものが確認されるが、初めてフランス語訳を試みたのはミシェル・ルヴォン（Michel Revon, 1867-1947）である。これまでルヴォンの翻訳そのものが取り上げられることはほとんどなかったが、本稿ではルヴォンによる抄訳を検討することで、『源氏物語』の初期の翻訳の実態を明らかにしたい。

まず、ミシェル・ルヴォンなる人物について、簡単にその生涯を記す。ルヴォンは1867年、ジュネーヴに生まれた。アヌシーで中等教育を終えた後はグルノーブル大学に学び、1891年に法学博士となってジュネーヴ大学助教授として民法を講じた。そして、1893年に東京帝国大学法科大学外国人講師として来日する⁽¹⁾。ルヴォンは日本での職務の傍らパリ大学文科大学へ「北斎の研究 (*Etude sur Hokusai*)」および「日本人における華道について (*De Arte florali apud Japonenses*)」の2論文を提出し、1896年7月の公開口頭試問会を経て文学博士号を授与された。1899年にフランスへ帰国してからは、パリ大学文科大学の極東諸国歴史文明講座嘱託講師 (*chargé du cours d'histoire et civilisation des peuples d'Extrême-Orient*) に就任する。そして、1919年には日本歴史文明講座助教授 (*professeur adjoint d'histoire et civilisation japonaises*) となり、1920年には同正教授 (*professeur titulaire*) となる。1937年に退官するが、第2次世界大戦期にはナチスに2度自宅を接収され、終戦後は自宅に戻るものの1947年に病没した⁽²⁾。

ルヴォンの訳した『源氏物語』は、1910年にドゥラグラヴ社 (Librairie Ch. Delagrave) から出された『日本文学選集 起源から20世紀まで (*Anthologie de la littérature japonaise des origines au XX^e siècle*)』(以下、『日本文学選集』と記す) に収載されており、この『日本文学選集』はルヴォンが極東諸国歴史文明講座の嘱託講師をしていた当時に出されている。本稿では、『日本文学選集』について、どのような経緯で翻訳・刊行されたのかを講座の実態と併せて探るとともに、ルヴォンの『源氏物語』の認識を確認した上で、訳文を他の英仏の翻訳と比較しながらその特色について検討することにしたい。

1. 日本歴史文明講座と『日本文学選集』

前述したように、ルヴォンはフランスに帰国した後、パリ大学文科大学で日本文学に関する講義をしていた。実際の講座の様子に関して、まず吉江喬松の回想を紹介する。なお、引用文中の漢字（旧字体）はすべて新字体に改めている（以下同じ）。

……日本を知りたいといふ要求は、兎に角次第に仏蘭西人の間に強くなりつつあるのは事実だと思ひます。ルヴォン教授の『日本詩歌』（万葉集について）の講義でも、百人近い人が毎会出席して熱心に聴いて、筆記してゐる人も多く見受けま^{ママ}す⁽³⁾。

これは、吉江の『仏蘭西印象記』のうち、「早春の巴里」と題された1917年3月の記述である。百人となると、その盛況ぶりがうかがい知れよう。しかし、時代が少し下ると、戦局の影響のためだろうか、聴講者の数は激減する。松尾邦之助に次のような証言がある。

……講師はミシェル・ルヴォンで、講義プログラムには、徳川時代の文学と哲学と書いてある。（中略）聴講希望者があつて自然かうした講座が設置されたのならまだしもだが、仄聞すると、日本の官辺が一等国としての手前、パリ大学に日本文化の講座ぐらゐ無くてはなるまいと考へ、ソルボンヌ当局に献金をした上開設した、云はゞ押売の講座であつた。従つて善良なるルヴォン教授の如きも、間接に日本政府の金を貰つて抱へられてゐる様なものであつた。（中略）ひとに勧められて、私は一度このルヴォン先生の講義に出席して見た。五十名ぐらゐの机のある教室に、噂の通り三人の聴講生が淋しく片隅に集つてゐた。ルヴォン教授は生徒の数なぞ意に介せぬらしい調子で、（内心気になつてゐたに違ひない）貝原益軒のテキストをうつむいたまゝ機械的に説明してゐた。（中略）…フランスに於ける日本文学の地位はこの寂しいルヴォンの教室が立派に象徴してゐる様であつた⁽⁴⁾。

この聴講がいつのことであつたか特定はできないが、松尾の渡仏時期から考えると、1922年から1928年までの間のことであろう。時代は『日本文学選集』出版時より10年以上も下るが、松尾の証言は実際の受講者のものとして貴重である。また、松尾がここで指摘する講座開設における官辺筋の関与に関連する事項として、講座開設から4年ほど下るが、三井財閥がパリ大学に巨額の寄付をした事実があるので取り上げておきたい。1904年2月9日の「朝日新聞」に「三井家巴里大学に寄附」と題して載せられた記事を引用する。

今度仏国巴里大学文科大学に於て東洋殊に日本文明史の講座を開始するに付男爵三井八郎右衛門氏はは^{ママ}今回金七万五千法を同大学に寄附し左の書翰を巴里大学副総長^{ママ}リール氏に贈れり

拝啓承り候得者巴里大学は文科大学に於て東洋殊に日本の文明史の教授を開始せられ候由に御座候処拙者に於て黄金を補助致し候間右の教授を純然たる講座に編入し之を確立永久のものとせられ候様希望の至に御座候（中略）因て茲に金七万五千法を貴官の処分に任

せ候間何卒右の講座開設の費用中に御差加被下度候

右の金額は貴大学文科大学講師ミシェル、ルヴォン氏に於て拙者の提供承諾相成候に付承知致し次第貴官に御交附可致筈に致置候敬具

千九百四年二月三日 於東京 男爵三井八郎右衛門

巴里大学副総長 リヤール殿⁽⁵⁾

三井八郎右衛門とは三井家の北家（総領家）の当主が代々名乗った名前であり、この記事が出された当時は十代目の三井高棟がその名を名乗っていた。戦後に財閥は解体されることになるが、この記事が出された当時は絶大な力を持っており、政界にも幅が利いたことだろう。当時の7万5千フランは今でいう4千万円位の額である⁽⁶⁾。松尾の言うように講座開設に日本政府が関与していたならば、ルヴォンがソルボンヌで教鞭を執っていた背後に、このような高額の資金援助の動きがあったことも合点がいく。『日本文学選集』編纂目的としては、ルヴォン自身が序文に記しているように、日中戦争と日露戦争を勝ち抜いた未知の小国について、文学を通じてよく理解してほしいということがあったと考えられるが、それと同時に、末松訳がそうであったように⁽⁷⁾、日本政府が関与している以上、政治的な意図も十分考えられるだろう。特に日本は1907年に日仏協約を結ぶなど、フランスとの連帯を強くしている。資金の援助には、欧米との関わりが増す中で、日本の文化的水準の高さを示そうとする日本政府側の政治的意図があったものと推測される。副総長のリヤール氏に寄付金を送ることで、日本歴史文明講座に便宜を図ってもらうとともに、ルヴォンに日本文学の紹介を託したと考えられる。

ところで、『日本文学選集』には貝原益軒の著作として『女大学』⁽⁸⁾も載せられている。貝原益軒の著作物は、1920年代までに英訳ではいくつか出されてはいたものの、フランス語訳されたものは刊行されていない。先の松尾の記述では貝原益軒のテキストを使用していたようだが、この点と併せて考えてみると『日本文学選集』がルヴォンの授業での教科書的役割を果たしていた可能性も考えられるだろう。日本からの要望による講座開設の動きに併せて、教科書として『日本文学選集』を編纂しようとしたというのは推測の域を出ないが、ひとまず数多くの作品を詳しい解説とともに収載し、原文に忠実な訳を試みた『日本文学選集』は、教科書には相応しいものであったと言える。ポール・クロードル（Paul Claudel, 1868-1955）は『朝日の中の黒い鳥（*L'Oiseau noir dans le soleil levant*）』で、ルヴォンの『日本文学選集』に基づいて日本文学を紹介しているので、一部の日本関係者にも出回っていたようだが、書評も見つかっていない点などを考え合わせると、やはり講座のために編纂した教科書的性格が強かったと推察できる。

2. 『源氏物語』の抄訳に向けて—ルヴォンの『源氏物語』に対する認識—

ルヴォンは『日本文学選集』を編纂するにあたり、先行する日本文学史、特にウィリアム・ジョージ・アストン（William George Aston, 1841-1911）の『日本文学史（*A History of Japa-*

nese Literature)』⁽⁹⁾とカール・フローレンツ (Karl Florenz, 1865-1939) の『日本文学史 (Geschichte der japanischen Litteratur)』⁽¹⁰⁾を大いに参考にしたようである。ただし、それら先行の翻訳書と全く同じというわけではなく、訳出箇所や作品観については相違点も認められる。例えば、取り上げる作品の時代について比較してみると、全ページ数に対する平安時代に関するページ数の割合は、ルヴォンの場合27.7% (476ページ中132ページ) を占め、アストンの18.4% (408ページ中75ページ) やフローレンツの20.2% (642ページ中130ページ) と比べ、圧倒的に平安時代に対する割合が多いことがわかる。収載作品については、日本の特性を表すものを選ぶという基準であったが、平安時代と徳川時代で全体の半数以上を占めている。

平安時代に特に力を入れていることから推測できるように、『源氏物語』についても充実した内容を持っている。フローレンツの『日本文学史』は、アストンの『日本文学史』の内容に基づきながらさらに詳細な説明を加えたものになっているが、『源氏物語』に関して調べてみると、ルヴォンの作品解説やあらすじ紹介は、詳細なフローレンツのものと非常に近い⁽¹¹⁾。しかし、概説は先行の著書に依る一方で、作品に対する評価についてはいずれとも違う立場を取っている。ここでは、それぞれの翻訳者の立場を時代順に確認し、ルヴォンの『源氏物語』に対する認識が他に際立って高評価であることをみていく。

まず、外国人による初期の『源氏物語』受容を考える際に名前が出てくるのが、ジョルジュ・ブスケ (Georges Bousquet, 1845-1937) である。ブスケは、『源氏物語』の内容を「ファキ家と平家の間で起こった争い (la querelle de la maison des Faki contre celle de Hei)」⁽¹²⁾と捉えるなど内容を誤認し、さらに「日本のスキュデリーによって書かれた退屈な小説 (cet ennuyeux roman de la Scudéry japonaise)」⁽¹³⁾であると評した。このブスケの批評は、その後バジル・ホール・チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) によって、ブスケが紫式部のことを「この退屈な日本のスキュデリー (cette ennuyeuse Scudéry japonaise)」⁽¹⁴⁾と評したと形を変えて引用されることになり、それが何度も孫引きされる中で『源氏物語』評として定着していくことになる⁽¹⁵⁾。両者の否定的見解を不当なものとし、『源氏物語』の魅力について言及したのはアストンであった。アストンは、『日本文学史』の中で、「しかし、極端な日本愛好者 (このような類の人たちが全くいないわけではない) を除いては、紫式部をフィールディング、サッカレー、ヴィクトル・ユーゴー、デュマそしてセルバンテスと同じレベルに位置づけようとさえする人は誰もいないだろう。 (None, however, but an extreme Japanophile (the species is not altogether unknown) will go so far as to place Murasaki no Shikibu on a level with Fielding, Thackeray, Victor Hugo, Dumas, and Cervantes.)」と述べ、紫式部が西洋の偉大な作家には劣るとしながらも、「『源氏物語』には哀調、諧謔、愉快な感情の豊かな流れ、男性や風俗についての鋭い観察、自然の魅力の鑑賞そして日本語の優れた用い方があり、日本語は彼女の手によって最も卓越した地点に到達したのである (There are in the *Genji* pathos, humour, an abundant flow of pleasing

sentiment, keen observation of men and manners, an appreciation of the charms of nature, and a supreme command of the resources of the Japanese language, which in her hands reached its highest point of excellence.)」と続け、その魅力を伝えた。また、倫理観に触れながらも「言語はほとんど例外なく上品で洗練されてもいる (The language is almost invariably decent, and even refined)」とし、さらに「『源氏物語』は最もよい意味で写実的である (The *Genji Monogatari* is realistic in the best sense of the word.)」とも述べ、紫式部が当時の日常生活や環境を生き生きと描いていることにも言及している。ときをほとんど同じくして、ルヴォンは1899年に行ったソルボンヌ大学での最初の講義で「…『源氏物語』を開いてください。眼下には優雅な都の生活が広がっていて、私たちは当時の社会の習慣的活動を、つまりは、宗教的あるいは非宗教的な祭典、歌合せ、絵合せ、楽器の演奏、月の下での散歩、宮廷の人々の陰謀、高貴な娘たちの恋のアヴァンチュールを見物するのです。結局、閉じられた本の中で、私たちはルイ14世の時代について知るのと同じくらいよくこの古の日本の宮廷について知ることができるのです。(Ouvrez le roman de Ghennji, [--] vous avez sous les yeux toute la vie de l'élégante capitale, vous assistez à toutes les occupations familières de la société d'alors, aux fêtes religieuses ou profanes, aux concours de poésie, aux expositions de peinture, aux concerts, aux promenades sous la lune, aux intrigues des courtisans, aux aventures amoureuses des filles d'honneur ; et en somme, le livre fermé, vous en savez autant sur cette cour du vieux Japon que sur le siècle de Louis XIV.)」⁽¹⁶⁾と述べている。ブスケの酷評から脱して、新たに作品を分析した二人は、まず『源氏物語』のもつ写実性に注目したのであった。続いて1906年、フローレンツが『日本文学史』の中で、「『源氏物語』は、日本人が多くの場合過大評価しがちなその文学的功績とは関係なしに——そして外国人はその文学的功績をおそらく正しくは評価しないであろう——重要な価値を持っている (Das *Genji-monogatari* besitzt aus diesem Grunde auch ganz unabhängig von seinen dichterischen Verdiensten, welche die Landsleute der Verfasserin meist zu überschätzen geneigt sind, während das Ausland ihnen vielleicht zu wenig Gerechtigkeit widerfahren lassen wird, einen bedeutenden Wert.)」と述べ、日本と西洋で作品の受け取り方が異なることに言及したが、これは紫式部が西洋の作家には匹敵しないというアストンの評価への反論と見なし得るだろう。その一方で、「紫式部の写実的な描写はその当時の社会が完全に道徳的に放埒であったという印象を読者に抱かせる (dafs die realistischen Schilderungen Frau Murasaki's den Eindruck vollständigster sittlicher Verwahrlosung der damaligen Gesellschaft beim Leser hervorrufen müssen.)」や「この物語には官能的な趣味がつきまとっている (dafs es sinnlichen Kitzel erregen könnte.)」とも述べ、作品の倫理観についてはやや否定的に言及した。

ルヴォンは『日本文学選集』の中で、まず、西洋の作家との比較において、フローレンツの姿勢を踏襲し、日本人と西洋の批評家では作品の魅力の感じ方に違いがあることに触れている。ま

た、フローレンツが特に問題視した倫理観については「読者はこの物語がほとんど道徳のない社会を描写していると思うことだろう。この点については間違いなくそうだろうと思う。しかし手短かに伝えられたいくつかの事実だけで作品を判断するべきではないだろう。申し分のない娘であり、妻であり、そして母親でもあった紫式部は、物語世界の中で、彼女の生きた時代の正確な絵図を描きたいと思ったのだ。したがって、彼女は自分の周りで見た風俗の一般的な性格について隠すことはしなかった。それでもなお、彼女がその文体の慎ましきさによるかのようなその精神の美しさによって、全く女性らしい繊細さをもっともっとも奇妙な状況を描くことができたということは本当である。(On pourra trouver que ce récit dépeint une société peu morale. Nul doute sur ce point ; mais il ne faudrait pas juger l'ouvrage sur quelques faits brièvement rapportés. Mouraçaki Shikibou, fille, épouse et mère sans tache, a voulu, dans le domaine littéraire, nous faire un tableau exact de son temps ; elle n'a donc pas caché le caractère général des mœurs qu'elle voyait autour d'elle. Il n'en est pas moins vrai que, par la finesse de son esprit comme par la décence de son style, elle a su décrire les plus étranges situations avec une délicatesse toute féminine)」と述べ、反論している。さらに、ルヴォンによる新たな重要な指摘としては、「実際のところ、西洋の文学においては、かなり時代を下るまで、『源氏物語』にちりばめられたような心理描写ほど繊細なものを見つけるのは難しいと思う (En réalité, je crois qu'il serait difficile de trouver dans les littératures occidentales, jusqu'à une époque assez récente, des pages de psychologie aussi fines que celles dont le *Ghennji* est pour ainsi dire semé)」と評価したことが挙げられるだろう。ルヴォンは1899年の段階では、その写実性を評価するにとどまっていたが、1910年には、先に挙げた先人のコメントを踏まえた上で、自分の見解を示しているのである。特に、その心理描写を評価する姿勢には、その後西洋人らによって『源氏物語』が紹介される際に「心理描写」がキー・ワードになっていることから、その先駆性がうかがえよう。

さて、ルヴォンは抄訳するにあたって、『源氏物語』のうち、桐壺更衣への寵愛、桐壺更衣の死、雨夜の品定め、若紫の垣間見の4つの場面を翻訳している。桐壺更衣への寵愛の訳出範囲は鈴木弘恭『新撰日本文学史略』（青山清吉、1892年）に引用されている部分と一致し⁽¹⁷⁾、残りの3場面については三上参次・高津鉄三郎『日本文学史 上巻』（金港堂、1890年）に挙げられている「源氏物語の例」のうち「桐壺更衣の卒去」「雨夜の物語」「東山にて源氏君始めて紫の上を見る」と題して引用されている部分に一致する⁽¹⁸⁾。これら4場面のうち、桐壺更衣への寵愛と桐壺更衣の死は、アストンやフローレンツには見られず、ルヴォンが独自に取り入れた範囲である。それぞれが印象深い場面であるが、特に桐壺更衣の死については、死の直前から始まり、更衣の葬送、帝の悲しみと靉負の命婦の弔問までを描いており、心理描写も充実した場面選択となっている。ルヴォンが述べた『源氏物語』の特性がわかるような配慮がなされていると言えるだろう。

3. 桐壺更衣の卒去場面の翻訳

続いてこの節では、具体的にルヴォンの訳文の特質をとらえてみたい。まずは、序文に書かれている翻訳の方針を確認する。まず、「テキストの翻訳そのものについては、可能な限り完全な正確さだけを目指した。(Pour la traduction même des textes, je n'ai visé qu'à une exactitude aussi complète que possible.)」と述べ、原文に忠実であることをうたっている。ただし、当然のことであるが、一語一句をそっくりそのままフランス語に移し替えることはできない。ルヴォンも続けて、「和の思想とは、独自の文法や言葉の動き、概念そのものに密に関係したイメージを有するゆえ、それをフランス語では同様な方法を用いて表現することはできない。本来の意図を歪めてしまうだけであって、もはや翻訳では無くフランス語への仮装でしかなくなってしまう。私が目指していたのは日本の思想を伝えることであり、それを実現する唯一の方法は、細心綿密な正確さで彼らの言葉の展開をたどっていくことなのであった。(On ne peut exprimer la pensée japonaise, avec ses modes particuliers, ses mouvements, ses images intimement liées aux conceptions mêmes, par un système d'équivalents qui, en faussant tout l'esprit natif, ne donnerait plus une traduction, mais un travestissement à la française. Or, je voulais montrer comment pensent les Japonais, et le seul moyen d'y parvenir était de suivre leurs développements avec une fidélité scrupuleuse.)」と述べる。

さて、このような翻訳姿勢を確認した上で、ルヴォンの訳業を他の翻訳書と比較しながら検討したい。本稿では、桐壺更衣がその死を間近にして詠んだ歌を取り上げ、修辞技巧と「限り」という「桐壺」巻のキー・ワードの訳出方法について検討する。

【本文】かぎりとして別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり⁽¹⁹⁾(「桐壺」巻、p.23)

ここでの「いかまほしき」には「生く」と「行く」が掛けられている。掛詞は音声、及び表音文字としての仮名というシニフィアンがベースになっているので、シニフィエのレベルの翻訳はほとんど不可能だと言われているが、英訳と仏訳を並べてみるとそれぞれ翻訳者の試行錯誤の跡が見える。以下、比較対象としてルヴォンの訳の他に、主な英訳及び仏訳として末松謙澄訳(初版1882年)⁽²⁰⁾、アーサー・ウェイリー訳(初版1925年)⁽²¹⁾、ヤマタ・キク訳(初版1928年)⁽²²⁾、シャルル・アグノエル訳(1959年)⁽²³⁾、E.G. サイデンスティッカー訳(初版1976年)⁽²⁴⁾、ルネ・シフエル訳(前半1978年)⁽²⁵⁾、ロイヤル・タイラー訳(初版2001年)⁽²⁶⁾、イナルコとパリ第7大学の研究者による翻訳(2008年)⁽²⁷⁾を取り上げ、刊行順にみていくことにしたい。なお、紙幅の都合上、改行は全てスラッシュ記号で示した。

【末松訳】“Since my departure for this dark journey, / Makes you so sad and lonely, / Fain would I stay though weak and weary, / And live for your sake only !”

「私のこの暗い旅への出発は／あなたをひどく悲しませ孤独にするものなので／体力もな

く疲れてはいるけれど、私は喜んでこの世に残り／あなたのためだけに生きていたい！」

【ルヴォン訳】 « Il est triste / Que ce chemin nous sépare : / C'est la destinée ! / Je voudrais pourtant vivre / Cette vie (avec vous) ! »

この道が私たちを別れさせていることは／悲しいことです。／これは運命なのです！／しかし私は生きたいのです／この命を（あなたとともに）！

【ウェイリー訳】 The lady heard him and 'At last!' she said; 'Though that desired *at last* be come, because I go alone how gladly would I live!'

女は帝の言ったことを聞いて「ついに」と言った。「望まれたことがついに現実のものとなったけれど、私は一人で行くのであれば生きている方が嬉しかったでしょうに。」

【ヤマタ訳】 La Dame l'entendit : « Le dernier ! reprit-elle. Cette fin désirée est venue, mais partant seule, avec quelle joie n'aurais-je point vécu ! »

女は帝の言ったことを聞いて「最後の道！」彼女は続けた。「この待ちわびた最後がきましたが、一人で旅立つことに関しては、なんて嬉しくない人生だったでしょう！」

【アグノエル訳】 « L'ultime, dites-[vous] ! / « [Las], en [ce] déchirement, / « [Sur] le chemin, [de vous, me] séparer, / « C'est pourtant bien la vie / « Que j'eusse désiré vivre. »

「あなたは」最後の道だと言います。／「ああ」「この」悲痛さの中／「あなたと私を」別れさせる道「で」／しかし本当に私が生きたかったのは／この命なのです。

【サイデンスティッカー訳】 "I leave you, to go the road we all must go. / The road I would choose, if only I could, is the other."

「私はあなたのもとを立ち去ります。私たち皆が行かなければならない道を行くために。／もし私が選べるのであれば、私が選ぶ道はもう一方の道なのです。」

【シフェール訳】 A présent nos routes / pour toujours vont s'écarter / quand dans ma détresse / j'eusse certes souhaité / suivre celle de la vie

今では私たちの道は／永遠に離れてしまうでしょう。／私は悲嘆の中で／もちろん願っていたのですが／この命の方の道を進むことを。

【タイラー訳】 "Now the end has come, and I am filled with sorrow that our ways must part: / the path I would rather take is the one that leads to life.

「今や最期です。私たちの道が別れてしまうという悲しみで私は一杯です。／私が選びたい道は命へと続いている方の道なのです。」

【イナルコ・パリ第7大学訳】 Grande est la douleur / d'avoir à se séparer / au terme de ce chemin : / combien j'eusse aimé continuer / à cheminer auprès de Vous !

この道の終わりで／別れなくてはならない／辛さは大きいです。／どれほどあなたのそばで／歩き続けたかったことでしょうか！

このように比較してみると、サイデンスティッカー訳以降、掛詞の扱いが大きく変わっていることがわかる。ウェイリーの自由訳とそれに依拠したヤマタ訳は置いておくとして、サイデンスティッカー訳以前はルヴォン訳やアグノエル訳がそうであるように、「命を生きたい」となっているが、サイデンスティッカー訳以降では「命の道を行きたい」という解釈になっている。これはオスカー・ベンル訳（ドイツ語、1966年）に始まった工夫であり⁽²⁸⁾、ベンルは「命の道」に「生きる」という意味を含ませ、その道を「行く」とすることで掛詞のニュアンスを再現している。日本の注釈書でこのような現代語訳を示すのは1971年刊行の『日本古典文学全集』（小学館）以降である。以後の翻訳が大方同じような訳出態度になっていることを考えると、ベンルの先見性がうかがえる。

ベンル訳以降はほぼ同じ方針で訳出されているが、若干の違いがある。当該箇所は桐壺更衣の死が迫っている場面であり、ここでは「行く」よりも「生く」の方が重要な響きを持っていると考えられるが、サイデンスティッカーは「道を行く」とはしてはいるものの、「命」という単語は使っていない。イナルコとパリ第7大学の研究者による翻訳もその点では同じ処理である。同訳は読みやすさを意識した翻訳なので逐語訳になることを避けたのであろうが、サイデンスティッカー訳同様、生きたいと強く願う桐壺更衣の印象的な姿が薄くなっている。また、シフェールやタイラーは、母音が5・7・5・7・7となるように和歌を翻訳している。シフェール訳に「今では」や「永遠に」などという原文には見られない単語が用いられているのは、その制約からだと考えられる。

掛詞については、以上見てきたように、ベンルによる新たな解釈が出される以前の翻訳であり、ルヴォンは掛詞として訳出していないが、「生く」のみを採った訳としては非常に正確に原文をおさえていると言え、むしろ死を前にして生きることに執着したい更衣の切実な気持ちが表れている。

続いて、「限り」という語に注目したい。先にみてきた英訳・仏訳では、桐壺更衣の和歌中の「限り」という語を、訳出していないものもあるが、「最後の道」や「最期（の時）」、「道の終わり」などと訳しているものもあった。しかし、ルヴォンは「運命（la destinée）」としてこれを処理している。この訳語選択を考える際には、「限り」という語が「桐壺」巻でもっているイメージが関係するように思われる。「桐壺」巻で多用される「限り」という語は、桐壺帝および桐壺更衣を取り巻く環境が、常に制約に縛られているものであることを印象づけている。ルヴォンが訳出した範囲のなかでも、和歌の他に「限りあれば」「限りあらむ道にも」「限りあれば」と3回使われている。しかし、「限り」については、「限りあらん道にも（Le chemin de ma vie, comme le vôtre, est limité）」の1例しか訳に反映されていない。他の訳文を見ている限り、「限り」の意味がわからなかったとは考えにくく、むしろ同語反復を避けるために、「限り」を本人たちの力ではどうすることもできない「運命」という語で表現し、場面のキー・ワードとして歌の中に

反映させたと考えられる。当該和歌における「運命」という訳語選択は、二人の置かれている状況ともうまく響き合っており、違和感はない。序文で言及していた日本語の「言葉の動き、概念そのものに密に関係したイメージ」をフランス語で表現するとはこのような例を言うように思われる。原文に忠実でありながらも、原文の全体的なニュアンスも考慮した翻訳になっていると言える。

おわりに

従来、20世紀前半に出版された『源氏物語』のフランス語訳については、翻訳した人物についての伝記的な研究が主流であり、ルヴォンの場合も『日本文学選集』出版の背景や『源氏物語』の訳文の検討という点に関しては、論じられてこなかった。本稿では、ルヴォンの仕事を再検討すべく、『日本文学選集』編纂の背景と『源氏物語』の翻訳作業という大きく二つの観点から考察した。

まず、ルヴォンが教鞭をとっていた日本歴史文明講座について、講座開設に日本政府が関わっていたこと、および三井財閥から多額の援助があったことを、当時の新聞や受講生の覚え書きをもとに明らかにした。そこには、欧米諸国との関係が深まる中で、日本の文化的水準の高さを示そうとした日本政府の意図も推測できるだろう。また、『日本文学選集』がその講座での教科書的性格を有していた可能性にも言及した。

続いて、先行して編纂されたアストンの『日本文学史』およびフローレンツの『日本文学史』と比較し、平安時代に極めて力を入れている点を確認するとともに、『源氏物語』の評価をブスケのものから順番に比較し、ルヴォンが『源氏物語』を極めて高く評価している点にルヴォンの『源氏物語』認識の特色があることを指摘した。『源氏物語』訳出範囲の選択については、日本人によって編まれた文学史を参考にしながら、自身の『源氏物語』評にうまく繋がるよう、心理的描写の多い場面を選択していることも明らかになった。

最後に、「桐壺」巻の和歌について検討したが、掛詞は訳出されていないものの、生きることを強く願う更衣の姿が印象的に描かれていた。また、同巻で多用される「限り」については、桐壺帝と桐壺更衣の関係性を印象づける効果があるが、桐壺更衣の歌で「限り」を「運命」と訳出したのは、和歌だけではなく全体的な特徴をおさえた上での訳語選択であったと考えられる。以上、本稿で論じてきたように、ルヴォンは、1910年という非常に早い時代に、『源氏物語』の表現における特質と価値をうまくとらえていたのである。

注

- (1) ルヴォンの東京赴任開始年度については、フランス側の1892年という記録と日本側の1893年という記録がある。この点に関して、畠中敏郎氏は「千八百九十二年の秋に出発して、年末または翌千八百九十三年の初

- 頭に来日した」(「ミシェル・ルヴォンと『日本文藝抄』』『比較文学の小道』 畠中敏郎先生論集刊行会、1973年(初出は1963年))と推測し、島本昌一氏は「明治二十五年来日を承諾し、翌二十六年一月八日に到着した」(『蔵書紹介』ミシェル・ルヴォン文庫』『法政』1990年9月)としている。
- (2) ルヴォンの生涯については、前掲(1)の畠中論文及び島本論文に基づいている。
- (3) 吉江喬松『仏蘭西印象記』、白水社、1947年(初版は、精華書院より1921年に出された)
- (4) 松尾邦之助『フランス放浪記』、鱗書房、1947年
- (5) 1904年2月9日の「朝日新聞」朝刊(「讀賣新聞」および「毎日新聞」にも同様の記事がある。)
- (6) 『明治以降本邦主要経済統計』(復刻版、並木書房、1999年)および『明治以降卸売物価指数統計』(日本銀行、1987年)に基づいて算出した。
- (7) 川勝麻里「末松謙澄『Genji Monogatari』刊行の辞に見る出版事情—イギリスに対する文化イメージ操作と徳川昭武」(『日本近代文学』第七三集、2005年)は、末松謙澄訳刊行の背景に、日本がイギリスと対等な国家であることを示そうとした政治的意図のあったことを論じるとともに、明治政府が末松訳の出版を後見した可能性についても言及している。また、川勝氏は「…出版費用は三井銀行ロンドン支店を通じて借金したともいう。」と述べており、末松訳の頃から三井財閥が外国への日本文学紹介に関わっていたことがうかがえる。
- (8) 『女大学』は、貝原益軒の『和俗童子訓』を元に作られたと考えられているが、実際の作者は不明である。しかし、ルヴォンは『日本文学選集』では、貝原益軒作として収録している。
- (9) W.G. Aston, *A History of Japanese Literature*, New York and London, D. Appleton and Company, 1914(本稿での引用は同書によるが、初版は1899年である)
- (10) Karl Florenz, *Geschichte der japanischen Litteratur*, Leipzig, C.F. Amelangs Verlag, 1906(本稿での引用は同書により、日本語訳にはカール・フローレンツ著、篠田太郎・土方定一訳『日本文学史』(楽浪書院、1936年)を参照した。)
- (11) 例えば、フローレンツは女三の宮のことを「Nyosan」と称しているが、ルヴォンも「Nyoçan」と表記している。このように、両者には特徴的な共通性が多く見いだせる。
- (12) Georges Bousquet, *Le Japon de nos jours et les échelles de l'extrême Orient* (tome premier), Paris, Librairie Hachette et Cie, 1877
- (13) Georges Bousquet, *Le Japon littéraire, Revue des deux mondes* (tome 29), Paris, 1878
- (14) Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese*, second edition, London, Kegan Paul, Trench, Trübner & CO., LTD., 1891(初版は1890年)
- (15) マイケル・エメリック「翻訳以前—『源氏物語』が世界文学になった時—」『平安文学の古注釈と受容 第三集』、武蔵野書院、2011年
- (16) Michel Revon, *La Civilization japonaise leçon d'ouverture du cours d'histoire de la civilisation des peuples de l'Extrême-Orient* (Sorbonne, 19 décembre, 1899), Paris, Bureaux de la revue bleue, 1900(なお、講義録とすることを鑑み、日本語訳は「です・ます」調にした。)
- (17) この本はルヴォンが『日本文学選集』執筆に際して参照した可能性があるが、畠中敏郎氏によって指摘されている本である。ただ、注記については必ずしも一致せず、抄訳として取り上げる範囲の決定に主に利用されたと考えられる。なお、ルヴォンの所持していた本は、現在法政大学のルボン文庫に所蔵されているが、同書については特に書き込み等はなく、所々に赤い傍線が引かれているだけであった。
- (18) この「源氏物語の例」では他に「陋巷の夕顔」「月夜弾琴」「野分のあした」の3場面が取り上げられており、ルヴォンは計6場面の中から3場面を選択していることがわかる。同書には注記は一切ついていないため、ルヴォンがつけた注記やルヴォンの内容理解には、何か別の注釈書を参考にしていただいた可能性が高い。『日本文学史略』と『日本文学史 上巻』は、あくまで訳出範囲の決定に利用されたと考えられる。
- (19) 『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(小学館、1994年)による。

- (20) 本稿での引用は Murasaki shikibu, *Genji Monogatari the most celebrated of the classical Japanese romances*, translated by Suyematz Kenchio, Yokohama, Z.P. Maruya&Co., Limited, Second Edition, Revised, 1894による。
- (21) 本稿での引用は Lady Murasaki, *The Tale of Genji*, translated from the Japanese and with an Introduction by Arthur Waley, Mineola/ New York, Dover Publications, first published in 2000, originally published in 1929による。
- (22) 本稿での引用は Mourasaki Shikibou, *Le Roman de Genji*, traduit par Kikou Yamata, Paris, Librairie Plon, 1928による。
- (23) Murasaki Shikibu, *Le Genji monogatari (Bibliothèque de l'Institut des hautes études chinoises ; v.12)*, traduit par Charles Haguenauer, Paris, Presses universitaires de France, 1959
- (24) 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji (vol.1)*, translated by Edward G. Seidensticker, Tokyo, Charles E. Tuttle Company, 1978による。
- (25) 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *Le Dit du Genji; magnificence*, traduit par René Sieffert, Paris, Publications orientalistes de France, 1988による。
- (26) 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji (vol.1)*, translated by Royall Tyler, New York, Viking, 2001による。
- (27) *Le Roman du Genji ; Le clos du Paulownia, Cipango (Cahiers d'études japonaises)*, n° hors serie, traduit par des chercheurs du CEJ (INALCO) et du GREJA (Université Paris 7), 2008
- (28) *Die Geschichte vom Prinzen Genji*, verfaßt von der Hofdame Murasaki, übersetzt von Oscar Benl, Zürich, Manesse Verlag, 1966 当該場面のペル訳は以下の通り。「Obgleich wir wissen/ daß unser Leben begrenzt ist, / Scheiden ist traurig -/ wie gerne schritte mit Euch/ ich weiter den Weg des Lebens !» (命に限りがあることを／私たちは知っているけれど／別れることは悲しいです。／命の道をあなたとともに歩めたら／どんなに幸せでしょう！)

※ 本稿において引用した英文、仏文、独文に付した日本語訳は論者によるものである。